

《関西文化研究会》

幕末期文人の生計

－潤筆と書画会－

佛教大学 非常勤講師 鷺原 知 良

1. はじめに

筆者は、江戸時代後期の文人を研究の対象としており、その中でも主に漢詩漢文を専門とした文人を対象としている。仮名文字と漢字、柔らかい仮名の文字に対して漢字というのは四角い、固いイメージを皆さんお持ちかもしれない。その漢字を使う漢詩漢文を専門とする文人たちも、実際には人間として食べていくための生活をしているのは一般の人と同じである。徳川幕府による治世が終わりを迎える幕末期に、文人たちがどういうふうにし計を立てていたか、その一端を論じたい。

2. 中島棕隠と寺門静軒

今回論じるのは年号でいうと天保の頃のことである。大阪に天保山という観光名所があるが、これは天保年間に当地に人工の山をつくったことから由来している。天保の改革という、江戸時代三度めの世直しの行われた年号でもある。鎖国体制であった日本に西洋の船が接近し、また米の凶作により飢饉の起こった時代でもある。

その時代に、漢詩漢文で生計を立てていた二人の人物について述べる。一人は中島棕隠(1779-1855)、京都の人である。もう一人が寺門静軒(1796-1868)、江戸の人である。二人とも若い頃は、学問に優れる一方で、いわゆる遊び人でもあったようである。

棕隠は静軒よりも、二十年ほど年長である。棕隠は京都で父の代まで家庭教師を勤める家に生まれた。家庭教師といっても相手は宮家、すなわち天皇の子息の家で、「侍読」として漢詩漢文を教えていた。そのような家柄に生まれたが、結果として棕隠は跡を継がずに独立した学者として、どこにも仕えず生きていくという人生を歩むことになる。当時の人は学問を始めるのも早く、今でいえば小学校に入る前の年齢から漢詩漢文を学び始める。加えて棕隠は漢詩漢文だけでなく国学や和歌も学んでいる。そうして、当時は数えの年齢で言うので十九歳、つまり今でいえば大学に現役入学した年齢くらいで、早くも最初の作品集、漢詩の本を出版する。どのような漢詩かというと『鴨東竹枝二十首』という標題で、「鴨」というのは鴨川のこと、その東にあたる祇園の花街をいう。「竹枝」というのは、その土地の情景を詠んだ詩である。ゆえに漢詩漢文といっても、その取り上げている内容は堅苦しいものではなく、その町の都市文化の華やぎ、あるいはそこで交わされる男女の情を描く漢詩であった。これが京都らしい花街を詠んだ華やかな漢詩だということで評判

になる。

若くして新進気鋭の作家として注目されると、調子に乗って挫折をするという例がときどきあるが、棕隠もそのようなケースに陥つたらしい。詳しい背景はわからないが、「失行のため汚名を得て、寛政十三年には妻を伴って江戸に下り」(『日本古典文学大事典』)これが二十代半ばくらいのことである。親族や学問の仲間からも絶縁された様な状態で、京都にもういられなくなる。そうして十年あまり江戸で暮らした後、再び京都に戻ってきた。しかし、棕隠の才能というのは、やはり世間の認めるところであったのか、その後、再び『鴨東竹枝二十首』を増補して出版する。最初は二十首であったのが、次は六十五首、さらに百二十首と増やしていき、棕隠の漢詩における代表作となった。これが棕隠の略歴である。

一方、江戸の静軒の方は、自分で自分の半生を振り返り「為すべきの悪は亦、為さざるはなし」と言っている。この悪というのは、犯罪とか法律的な悪ではなく、江戸時代に悪所、悪場所という言い方があった。悪所の一つは花街、つまり色里である。男性がお金を払って女性と遊ぶわけであるから、当時の法律には触れないが、もちろん道徳的にはあまり良いことではない。もう一つは、芝居である。歌舞役者も当時はそういった遊びの対象としてお金を介して相手になる事があった。芝居と色里というのは、江戸時代の二大悪場所である。「放蕩無頼の青少年期を過ごした」(『日本古典文学大事典』)とあるように、静軒も若い頃に散々遊んだが、棕隠のようにそれが祟って江戸にいられなくなるということとはなかったようである。しかし、静軒は漢学者として学問を積み重ねていくが、水戸藩に学者として士官する望みはついに叶わなかった。水戸藩は徳川御三家の一つで、学問の特に盛んなこの藩に静軒の学問は認められなかったのである。

結局どこかの大家に召し抱えられることはなく、自分で塾を開いて学生に教える道を静軒は選ぶ。その中で、静軒が書いた最大の著作というのが『江戸繁昌記』である。江戸には多くの繁華街があった。前述した芝居、歌舞伎もあり、江戸の最大の花街である吉原も存在する。芝居の事、吉原の事、あるいは深川や品川など今でいう水商売を中心とする街である。それらのことを『江戸繁昌記』は詳しく描いている。この『江戸繁昌記』は評判となりベストセラーとなる。それまで主に私塾の学生からの月謝で生計を立てていた静軒は、『江戸繁昌記』の原稿料によっても生活を支えられるようになる。二編、三編と続刊し、いずれも好評を得たようである。しかし、この『江戸繁昌記』は、武士階級に対する風刺の内容を含んでいる為に徳川幕府に目をつけられ、出版差止めの命令が出る。けれども静軒は筆を擱かずには書き続けた。その結果、「武家奉公御構い」の処分を受ける。“御構い”とは「お構いなく」の反対の意味で「構う」、つまり「武家に奉公する事を構う」という意味で、静軒が武士として仕官することは一切認めないという処分である。こうして否応なく静軒は筆一本で生きていくということになる。

このように若い頃によく遊び、よく学んだといえる経歴をもった二人の文人が原稿料、執筆料をどのように考えていたかを以下に紹介していく。

3. 中島棕隠『錦西隨筆』

出版されなかった棕隠の『錦西隨筆』が書写本として残っている。出版公表されなかったこともあってか、棕隠はこの隨筆で齒に衣を着せない正直な本音を書いているようである。当時の文人や漢学者というのが、どういう事を考えて生活をしていたのかを知るのには興味深い資料である。当時の文章、これは漢文ではなくて和文の形である。和文といっても、たくさんの漢語が漢学の文人らしく出ている。

「又、亡友頼山陽、」山陽は、おそらく江戸時代の漢学者の中で今日でも一般に最も名前が知られている一人だが、棕隠と同時代の文人で、京都で後半生を送った人物である。山陽と棕隠は、当時の京都の文人の漢学の分野では並び立つ存在であった。山陽は五十代の時に棕隠よりも先に亡くなる。「先人春水翁」は山陽の父である。「春水翁より相つゞひて、文名を馳せ、」文人として名前をよく知られた。「詩文を乞う者多かりし故、」有名になると、詩や文章を先生自身の筆で書いて下さいとの依頼がくる。「潤筆をよく貯へ」、「潤筆」とは本来は筆を墨で潤し書画をかく意味で、転じて、その謝礼としての書き賃をいう。文章や詩をつくる事は、自らの学問の結果として出す物であり、それを書いて謝金を貰うというのは、卑しい行為と見られた。お金を貰って生活の糧にすることは潔くないという建て前があったのである。しかし、棕隠は執筆料について正直に書いている。山陽はその書き賃をたくさん貯め込んだ。棕隠と山陽は友人同士であったが、「儉嗇も亦一時に名高かりしが」と遠慮なく書いている。けちなことでも名を知られた山陽であったが、「其勢に風靡して、」一世を風靡するという言い方があるが、そのような風潮が京都の町に広まり、「都下の書を好むもの、揮毫を乞ふこと有れば、必ず謝儀を贈る例となって、藝林の士の大幸となれり。」山陽が有名になり、執筆料を貰うということが定着したので、山陽ほど有名でなくとも、ある程度の名前が知られた文人にとっても幸いとなったというのである。

一方、棕隠の場合をみていくことにする。「余も髫齡より、先考に侍し、日々学生に句読を授け、」先考というのは亡くなった父である。髫齡は七、八歳頃で、小学校に入った頃から父の助手として教える側にまわる。「或は講演を助けなどして、廿五六歳まで、孳々と努めて、自己の繙書に暇すくなきを歎きしほどなり。」学者の先生というのは、このように執筆料を貰うか、あるいは先ほどの静軒の私塾の例のように、授業料を貰うかで生計を立てていた。棕隠も子どもの頃から父の助手をして、二十代半ばまで一生懸命教えることを生計の道としていた。そうすると、なかなか自分の為に書物を紐解く時間が無い。そのため「先考易費の後よりは」難しい言い方であるが、父が亡くなった後は、「屏居看書のみにして、童子輩に句読を授るの煩を謝し」この「謝」というのは、面会謝絶という時の「謝」で、止める、避けるという意味である。家に籠って本を見るだけで、子どもや若い人に漢詩漢文を読むのを教えるというのも煩わしいのでそれもやめて、「遠近相識者の、詩文点竄にのみ日を送り」授業や講義をするのは煩わしいから、自分はもうしない。ただし、詩文の添削指導だけはする。手紙で送ってくる人もあれば、直接持ってくる人もいる、そうい

う人たちの漢詩漢文を書いたものを、添削して修正する。それで謝金を貰うのである。「旁ら揮筆の需めに応ずる一業、間断なく」山陽と同じように、自ら筆を揮い、自分の詩や文章を書いて豊かな人の需要に応えるのである。「此を以て生活し、潤筆を仰ぐの外はなし。」自分は主に潤筆を生計の手段とした。棕隠の後半生、五十歳か六十歳あたり天保年間に書かれた随筆であるが、「文化末より天保の初までで云えば、都下にて、詩文著作のみを以て業とし、世に渡る物は、山陽外史と余ばかりなり」、つまり潤筆料、書き賃だけで京都で世に渡ったのは、山陽自分自身だけであるという自負を述べているわけである。「其の他同業の者、万藝高き有れども、多くは日々の弟子を集め、講読に暇なく」他の同業者も、潤筆で稼ぐけれども、それだけでは足りないので、講義をする。「或は摺紳大家に詣り、侍読をつとめ」これは棕隠の父がつとめていた王族貴族や高貴の人の専属教師である。「或は福医豪商の家課を逐ひ」、あるいは裕福な医者や商人の家庭教師をする。「趨巡って教授に勞す」教える為に駆け回らないといけない。「其の束脩を致すところ」、「束脩」というのは中国の古い言葉で、もともと干した肉を束ねた物である。これを学問の先生に入門する時に、入学金のような形で差し出したのが元で、月謝や入門の謝礼のことである。「薄微いはん方なきをも、猶、忍て務む。」授業料、入門料といっても、それほど高額を貰えるわけではない。そのため、生活の為にやっている。「歎ずべきの甚しきなり。此等齷齪（あくそく）たるよりみれば、」これは齷齪（あくせく）するの本来の漢字の読みで、生活のために齷齪しているのは嘆かわしい。「余輩収る所の潤筆は、微なりといへども、奔走の労なく、」自分がもらう潤筆料の方も、それほど高額でもない。しかし奔走の労もなく、どこかに教えに行ったりする必要がない。「応接の煩を省けば」書いてくれという人が家に来て、その対応はしないといけないが、それ以外は「自珍として」自分の体に時間の余裕があるという事である。「研田の筆耕を苦力することなり」、つまり文筆、硯を田んぼに例えて、硯を筆で耕す、自分の筆一本で詩や文章を作ることに苦心さえすれば、それでやっていける。このように文人として筆一本で食べていくという自負を、棕隠は『錦西随筆』で率直に著しているのである。

4. 寺門静軒『江戸繁昌記』

ただ一方で、やはり生活のために自分の作品を売というのは、あまり潔いこととはされず、学者としてはあるまじき事だという建前も当時は強かったようである。

当時の江戸で盛んに行われた、今でいうイベントの一つに「書画会」というものがあった。この「書画会」とは言わば文人たちの作品の即売会である。料亭を貸し切って多くの来賓を招き、そこで書いた書画、字だけでなく、自分の漢詩に添える画を描く場合もあった。これがおおよそ静軒の生まれた寛政の頃から盛んになり、『江戸繁昌記』の書かれた天保頃になると酌取りの芸者まで出るようになるなどエスカレートして派手になっていく。

『江戸繁昌記』で静軒は当時の風潮について、「当今、文運の昌んなる、文人墨客、会盟して社を結ぶ」、つまり文人たちがグループをつくり、「而して人、苟しくも風流、胸中墨

あり、才徳並び具はる者、一たび盟に与かれば、衆、推して先生に拝す」、そうしたグループに入り、そこそこの才能があれば先生と呼ばれるようになる。そして「声、四海に流れ」、名声が四方に広まると、「油然の雲、沛然の雨、人の欽慕せざるはなし」益々崇めたてまつられる。「予、盟に与かることを得ずといえども、亦、嘗て末筵に列なる者、数回、其の盛事の如きは略、観て尽せり」というように、静軒はそうしたグループには属さなかったようであるが、何度かゲストとして書画会に参加したようである。文人の名前を売る競争の激しい中、静軒はグループや同盟に入らないで、一歩引いたところから書画会を風刺的に見ている。

「其の地、多くは柳橋街の万八・河半の二楼を以てす」、当時の江戸の高級料亭で催された。「会に先だつこと数月、日をえらんで一大牌を掛け、書して曰く」、まず数ヶ月前から看板を掛けて宣伝をする。そこに並んだ諸先生の名前は、「是に於いてか、人の、世に先生あることを知らざるはなし。蓋し漢朝の及第放榜の事と、略、同じ」、つまり中国の「科挙」という公務員・役人になる為の難しい試験、その及第合格者の名前が掲示されるの似ているというのである。「榮、知るべし。観る者、聚まる。肩を摩し、踵を累ね、視点して曰く、『某は画人なり。某は詩人なり。某は儒流。某は書家。彼は插花師の始めて名を宣するなり。此は清本氏の女の初めて場に上るなり』と」、詩をつくる人や、儒学者、それだけでなく画を書く人、書家の人、さらには生け花、華道の先生。清本というの浄瑠璃節の流派で、その先生もやって来る。有名な文化人の名前を江戸の庶民たちが見上げている。ただ一方で、「佇立して牌を仰ぐは、又、法場にして罪人の加木を読むが如く一様」、つまり中国の科挙の合格者を書いているようだを持ち上げておいて、今度は、何々の者はこれこれの罪によって、お仕置き、死罪にしたという高札とも似ているという皮肉をいうのである。

「未だ会せざるの間、先生鶏起し、孜々として奔走、之務む。高門鼎薄、敢へて往かざるはなし。亦、内熱の恐れを省みず」、当の先生は事前に、とにかくたくさん来て下さいよと金持ちの家に頼みに駆け回る。そして、「当日、先生、儀装曲拳、儼然として上頭に坐す」先生が主役であるため、上座に座る。「坐後、闌を施し案を据ゑ、計人二位、筆を簪して簿を守る」、入り口には受付があり出席者名簿にご祝儀などを記録する。「乃ち賓主の相揖する、恰も賀客の年を典舗頭に拝するが如し。」客と、会の主催の先生が挨拶するのは、ちょうど年越しの為に大晦日に質屋に来た者同士が、質屋で年を迎えて挨拶するようなものと皮肉をこめている。「剣を掌どる者あり。飯を管する者あり。酒監・茶令、手を並べて職に在り」、客の剣を預かり、食べ物を出して、お酒を出して、接待する。「客、漸く麁至す。主人、左に接し右に応ず」、次第に客が集まってくると、主人は右往左往して挨拶に忙しい。「豈に献酬に遑あらんや。客、互ひに主と為り、盃を挙げて相属す」、主人がゆっくり杯をやり取りできないので、客同士が杯を交わしている。「名妓数名をまねき、儻に充て、酒を佐く。調弄粉諠、糸竹管絃の娛しみなきも、一笑一盃、亦以て酔狂を発するに足る」、あくまで書画の即売会なので、普通の宴会のように歌や踊りがあるわけではない。ただ、接待を務めるのが「名妓」すなわち有名な芸者である。そこで書や画を書くという事がなければ、料亭でお酒を飲んで宴会をしているのと区別がつかないという様子である。

「紅氈数席、地を画して場を設け、諸先、代々登る。只見る、紙上竜走り、筆下鳳あるを」とは、そこで先生が筆をふるっている様子を表現している。「腕中神あり、指頭鬼あり。一抹の墨、万金購ひ難く、寸素の丹、千載伝ふべし。観る者、堵を傾く。人の争ひ乞ふ、坐中、指掬ふべし」、有名な先生の書いた物を買うために多くの人が争って集まって来る。江戸時代、漢詩漢文は主に男性の学問であったが、中には女流の文人もいた。「浄粧治服、艶発人を射る者は、謂はゆる近来流行の女先生是れなり。纖手筆を拈り、墨を唇にして態を成す。人麗に毫靈なり」、おそらく容姿端麗な先生なのであろう。「衆賓圍繞、蟻付蠅着、随つて謝すれば随つて乞ふ」、揮毫を断つても客が次々と来て、大変な人気を博している。「厳師、傍に在つて熟視するも、亦、其をして「別なし」の教へを守つて、手親ら授受せざらしむることを得ず。」儒教道徳で男性と女性というのは、みだりに一緒にいるものではないとするが、この書画会では厳しい先生が監視していても、それを守るのは難しい。男の客が女先生の手を握りたがるというのである。「酒流れ殺崩れ、喧囂轟き、塵埃雲蒸す。千筵の坐間、寸も虚白なし」と、とにかく書画会は大賑わいである。「然れども主人の心、猶ほ一鉢の滴り、盛会の海を助けんことを望む」、これだけたくさんの客が来ているのに、主人はさらに一人でも多く来て欲しいと望む。「雑踏漸く収まり、楼頭燭すべし。幹人徇へて曰く、「ト、夜に及ばず」と。酔客、已むことを得ずして起つ」、書画会は昼間に開かれて、夜の部はないので、お酒を飲んで、良い機嫌になった客は仕方なく帰っていく。

このように当時の江戸で盛況であった書画会は、「扇面亭某父子、風流相承け、並びに会儀に閑ひ、其の格式に達す」とあるように、扇を売る商家が、書画会の世話を一手に引き受けた。「故を以て集會を謀る者、皆先づ就いて質す。蘭亭・西園、毎月の集會、与かつて力あり」、中国の王羲之の文章で名高い蘭亭の会、蘇軾が参加した西園の会など歴史に名の残る文章家たちの集いは一回きりであったものが、書画会を月例で開く商業主義一辺倒への当て擦りである。「著はす所の「江戸諸名家人名録」二巻、田舎に行はる。」この扇屋はまた、当時の江戸の有名な文人の人名録を出版した。地方の人が江戸に遊びに出る際に、その人を訪ねて揮毫を依頼するための手引きとして、当時の名士数百人の住所を記載している。そうした本が商品として売れるほどに、当時の文人たちの商魂は逞しく、書画会の盛況は過熱していたようである。

5. 潤筆料と貨幣価値

それでは、こうした風潮の中で、棕隠、静軒は執筆料をどのくらい貰っていたのか。当時のお金の単位、江戸時代の一両が今のどのくらいにあたるかには諸説があつて、なかなか判断が難しいが、ここでは、わかりやすく一両は約十万円と考えてみる。金一両は錢四千文で一文は約二十五円。かけ蕎麦が江戸時代後半を通じて、ほぼ十六文（約四百円）程度であつたらしいので一つの目安となるであろう。

静軒は、『江戸繁昌記』を書くまでは、非常に生活が苦しかった。天保三年が初版で、後

に幕府に出版を差し止められながら五編まで書きついだ。その初編の序文によると、天保二年五月、三十六歳の静軒は病気に臥せり学問の書物を読むことが出来なかったため、雑書、比較的読みやすい本を寝転んで読んでいた。そうした事を十日ほど続けていたある日、独り言を言ったのだろうか、一人でその本を投げ出して嘆いて言ったのが、「近歳、年少なく豊かならず。百文の錢、纔かに数合の米を買ふのみ。」米の値段は現代とは異なり江戸時代では非常に不安定である。天保の飢饉では、米の値段は何倍にも値上がりした。百文というのは、現在の約二千五百円である。数合の米というのを仮に六合とすると、約一キロである。これは非常に高い。二千五百円で一キロしか買えないというと、現在の米の値段よりもかなり高いさらに飢饉などで米価が騰貴すると、三、四合しか買えなくなったともいう。そうした中で、静軒は『江戸繁昌記』の原稿料が入り、経済的には非常に助かったのである。二編を次の年に出し、三編を次に、ほぼ年間一冊『江戸繁昌記』を執筆していく。その三編の序文には「頃者、繁昌記二編成る。米に易へ、錢に換へ、又、数月の飢えを支ふ」とあるように、書肆から貰う原稿料を数月の飢えをしのぐ米や錢に充てた。

ただ、さすがに静軒は序文に具体的な金額までは記していない。ところが、その額が、棕隠が『江戸繁昌記』の京都版として書いた『都繁昌記』の序文によってある程度わかるのである。「且つ近來静軒居士の著す所の『江戸繁昌記』に倣ひ、其の名を冒し其の威を仮る者にして、一は書肆、利を射るの勸めに出で、『江戸繁昌記』が江戸で大いに売れている。そこで『都繁昌記』を出したら、そこそこ売れるだろう。江戸時代にもこのように後続作品の当りを狙うことはよくある。「一は自家飯糰の為に駆らるる」、棕隠自身が食べてゆくためにも、この『都繁昌記』を書くというのは一つのチャンスだと述べている。棕隠に比べれば、自分の筆には力がないと謙遜もするが、「然れども居士も亦『米に易へ錢に換へ、数月の飢を支ふる』と、静軒の三編の序文を引用し、「語、有るときは、則ち鴻・鼈分有りとも、其の食を求むるに於いては一のみ。」静軒はコウノトリのようなもので、自分はスッポンのようなものだが、やはり文人として食を求めることでは変わらない。しかしながら、「飲ずる所は彼は大海平野に翔り、応に飽きて且つ豊かなるべし」、江戸の方が立地的に食べ物にも恵まれている。京都は海が遠く、特に海産物が高値で鮮度もよくない。それに加えて、「則ち換ふる所の繁昌記一編、金十両に下らず」、つまり『江戸繁昌記』の原稿料は現在の百万円くらい。そして、「之を以て米を得、且つ地引の魚、地大根、喜和多の麻久呂（まぐろ）・小松菜・浅草海苔・角田の白魚等を買ふ可し」、江戸の新鮮な魚や野菜を買うことができた。京都は江戸に比べて米も高く、百文で二合五勺と、江戸のおよそ倍である。京都は食費が嵩むのに、自分の原稿料は静軒より安いと棕隠は嘆いている。

その棕隠は『都繁昌記』を書くにあたり版元である本屋と、「書肆某余に『都繁昌記』を囑す。金二両以て潤筆と為すを約す」と二両で契約した。静軒の『江戸繁昌記』五分の一下である。「一編凡そ三十頁、一頁四百字、起藁より浄書に至る、合して八百字、考正点竄を加へ、一千字に垂とす」、三十頁分の下書き、清書、校正などで一千字分の手間をかけている。「彼囑する所に従へば、則ち千文を吐き、四百錢を得」、しかし一頁（当時の和綴

本での「丁」あたりの原稿料は四百文ほどしか入ってこないという。二両を八千文とすると、いささか計算が合わず、また『江戸繁昌記』は平均四十頁余りであるが、いずれにしても『江戸繁昌記』よりも、かなり少ないことに変わりはない。

そして結局、二両では安すぎると嘆いていたところへ、「余、此の記を作り、藁、僅かに一二紙を脱する時、浪華の蘭蕙堂主人、偶来つて之を読み、上文筆乾くの歎有るに至つて」、『都繁昌記』を頼んできた書肆某とは別の大坂の本屋が来た。こちらは実名が書かれている。「奮然として腕を扼して曰く、「我之を潤さん、我之を潤さん」と」、私が棕隠の『都繁昌記』これを潤してあげましょう。「乃ち佩囊を探り、其の有る所をつくし、金五両を抛ち、全藁を買ふことを約す」、別の本屋が五両出すと言ったため、そちらに売ったということである。ある程度の潤色も加わっているかもしれないが、当時の文人の生活状況をうかがうことの出来る貴重な情報である。

6. 最後に

文人たちの収入以外にも、『都繁昌記』や『江戸繁昌記』には、様々な物の値段が出てくる。『都繁昌記』に書かれているもので、京都で乞食仲間、つまり物乞いをする人の仲間に入るための金額についても書かれている。三千文から四千文くらいで十万円近く取られたということである。また、京都で歌舞伎の栈敷を借りるのが約一両で、人気の演目では二両に値上がりすることもあったという。『江戸繁昌記』では、現在でいうと宝くじにあたる富くじについても書かれている。富くじは一枚が四分の一両と高額のため、庶民は何人かでお金を出し合って買った。また、易者が占いをみるのが、二十四文であった。髪結いは三十二文くらいで、焼き芋は一本四文から十文で売っていた。風呂屋、銭湯が八文から十二文、手ぬぐいを銭湯で買うと結構高く、六十八文から百文であった。

一方で、贅沢品では、江戸時代後期に流行した観葉植物の「万年青（おもと）」が一鉢約十両であった。万年青を交配して育てた珍種を大名に売る時は三百両くらいになったものもあったという。現在の約三千万円にあたる。現代とは異なる社会状況において、貨幣価値の感覚を理解するのは難しいことであるが、棕隠や静軒の原稿料収入と比較しながら、当時の物の値段を見ることで、幕末期の文人たちの切実な暮らしの一端が浮かび上がってくるのである。

【参考文献】

1998『日本古典文学大事典』明治書院

日野龍夫校注 1989『江戸繁昌記 柳橋新誌』岩波書店

新稲法子訓注 1999『都繁昌記註解』太平書屋

(2014年5月7日、生活美学研究所本年度関西文化研究会における講演に基づく)

コーディネーター 武庫川女子大学日本文学部教授 管 宗 次